

現地の人の声を大切にす

秋田県立秋田高等学校 Shikika H.

私がこのスタディツアーに参加した目的は、カンボジアで行われている世界寺子屋運動の現場を訪れ、その現状や子供たちの授業風景を知り、現地の人の声を聞くためだ。私には将来、国際協力に携わり日本や世界で起きている問題に対して力になりたいという夢がある。その夢を実現するためにも、自分に協力できる何かを探したいという思いで参加した。

私たちは、首都から 300 キロメートル離れたシェムリアップ州のチョンクニア寺子屋と、リエンダイ寺子屋を訪れた。チョンクニア寺子屋は、唯一の水上に建てられた寺子屋だ。そこでは、月に入る 2%の利益をカンボジアの貧しい人々に与えるという活動が始まっており、これらは全て村人が考え出したものだった。アジアの中でも最貧国と言われているカンボジアで、村人が自発的に行動し利益を生み出して同じ村人同士助け合って自立していることは一番の驚きだった。

次に訪れたリエンダイ寺子屋では、授業をしている先生の横で小さい子供がその様子を見たり、生徒たちが熱心に授業を受けていたりする様子がとても印象的だった。寺子屋には少し小さいが本を読むための図書館のようなスペースもあり、地域の人たちも利用していると言っていた。



この 2 つの寺子屋に共通していたのは、寺子屋を中心に村のコミュニティが広がっていること、子供たち全員から“学びたい”という意欲や希望が伝わってきたことだった。寺子屋が単なる教育施設ではなく、憩いの場であり、村の中心になっていると感じた。また、この寺子屋を運営している日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所に訪問させていただいた時、今のカンボジアの就学率はどれくらいか聞いてみると、90%だと答えてくれた。事前にインターネットで調べていたデータよりも 35%も上昇していた。この数字や寺子屋の子供たちの様子を見たとき、現在は子供たちがきちん

と教育の機会を得られるような環境にあるのだと思った。

しかし、この考えは単なる自分の思い込みだったということにこの後、気付かされた。



夕方、学校に通う男の子の家に招かれ、箒づくりを体験しながら家庭の現状を見せてもらった。その家族は、首都から遠く離れた農村部で暮らし、箒を作り販売して生活をしている。その材料になる枝は、村から何時間もかけて歩いて行かないととれない貴重なものだと言っていた。箒は1つ10円でしか売れないため、1日中作らなければ十分な収入が得ることができない。そのため、男の子は学校から帰るとすぐに家の手伝いをしていると話した。



「僕は学校に行っているけど、そのせいで弟は学校に行けないし、勉強もできない。弟のためにも、僕が学校をやめて行かせるべきだと思っているんだ。」

その男の子は私にこう、打ち明けてくれた。そして、私はこの時初めて、伝わらない声や現状があることに気づかされた。今までは、カンボジアの就学率のデータは90%と高いから以前よりも教育が

普及してきていると思っていた。しかし、それはただの数字であって、その背後にはこの男の子のように教育を必要としている人がいた。自分の家族が生き延びるために1日中働き、それでも十分な収入が得られず、ぎりぎりの生活を送っている人たちがいる。そのため、学ぶことよりも今を1番に考え、学校を途中でやめてしまう。学びたいのに学べない子供たちがいる。子供たちには夢や希望がある。そんな未来ある子供たち全員に学ぶことの楽しさを知って欲しいと強く感じた。数字やデータの背景には、届かぬ人の声や現状があり、私が本当に目を向けなければいけなかったのは現状だった。数字にとらわれてはいけない、数字がすべてではないのだ。

帰国後、ずっと男の子の言葉が頭から離れず、毎日男の子のことを思っている。私にできることは何だろう。私1人の行動や言葉で世界を変えていくのは正直、難しいと思う。しかし、カンボジアの現状や出会った男の子の声を私がかわりに伝えていき、知ってもらうように、私からあなたへ、この思いを伝えればそれを聞いて知った人がまた誰かにこの想いを伝えてくれる。次々とつなげていくその想いは、いつか必ず大きな輪となって世界を変えていくことができるはずだ。

そして、私はもう1つ、大切なことに気づくことができた。それは、「その国が求める幸せはそれぞれ違う」ということだ。スタディツアー中、私はこんな言葉を聞いた。

「私は、カンボジアが発展することを望んでいない。」

私は、はじめこの言葉を聞いた時、衝撃を受けた。なぜなら、「彼らの幸せな暮らし」のためには綺麗な家を与え、交通や通信の整備を行うなどして私たちの国のように利便化することが必要だと思っていたからだ。また、彼らもそれを求めているのだと思っていた。しかし、現地の生活の中で、私たちの暮らしにはない彼らの環境に合わせた生活やあたたかさがあり、彼らなりの幸せがあると感じた。そこで私は、決して裕福だとは言えない環境の中でも、常に助け合っているカンボジアの人たちを見て、「今の全てを変える必要はない」と思った。発展する＝幸せではない。カンボジアの人たちの今までのあたたかい暮らしや和やかな時間の流れを大切にすることが、彼らの本当の幸せであるということに気づいた。

私が学んだことは、実際に行って現地の人々の声を聞かなければわからないことだらけだった。これはもちろん、インターネットからは得られない。現地の人々の声に耳を傾けることの大切さを学ぶと同時に、私たちが彼らから学ぶべきことも多いのではないかと感じた。カンボジアには教育を必要としている人がまだ残されており、日本では見られない彼らの良さがある。だから、このカンボジアの本当の現状を知ってもらうためにも、たくさんの人に伝えていきたいと思っている。そして、これからも世界中の人との関わりを持ち続けていき、1人でも多くの人々が国際協力に関心を持ってもらえるよう、活動していきたい。私にこのような素晴らしい機会を与えてくれた皆さん、本当にありがとうございました。